

森林太郎のドイツ留学についての 若干の考察

— Quellenkritik の方法による —

荒木康彦

はじめに

森林太郎のドイツ留学については、様々の視点から多数の研究がなされてきているが、史学理論に照らして検討すると、実証的に厳密になされた研究はさほど多くなく、今なお未解明の点が少なくない。そこで本稿では、新たに発見できた一次史料などに立脚して、森のドイツ留学の若干の点について、Quellenkritik（史料批判）の方法を援用して、出来るだけ厳しく考察してみたい。

1

森林太郎のドイツ留学に至る過程も、一次史料に立脚する限りでは、どのようになるかが、従来は厳しく考察されて来たとは言いがたい面がある。先ず、森林太郎のドイツ留学の発令などに関する一次史料を管見に入る限り挙げると、以下のようなになる。

①陸軍省『文書受領日記 明治十七年』

領収五月八日 本乙第七五号 出五月八日 番号進第七二三号 廳名
軍医本部

二等軍醫森林太郎獨逸國へ留學被仰付度存申進¹

②『明治十七年 公文録 官吏進退陸軍 從五月至八月 全』

二等軍醫森林太郎

右獨逸國江留學被仰付度此段

及上申候也

明治十七年六月五日

陸軍卿川村純義

左大臣熾仁親王殿²

二等軍醫森林太郎獨逸國留學被仰付事

右謹テ奏ス

明治十七年六月六日

左大臣熾仁親王

参議 福岡孝悌³

内閣陸六十

明治十七年六月六日

二等軍醫森林太郎獨逸國留學被

仰付ノ事⁴

辞令案

二等軍醫森林太郎

獨逸國留學被 仰付候事

六月七日⁵

③『明治十七年從一月至六月 日報 近衛局 軍醫本部 軍馬局 病馬
廐』

陸軍省受領參第九六五號

明治十七年六月十一日水曜日 日報 軍醫本部長陸軍軍醫總監松

本順

一 軍医本部課僚二等軍医森林太郎
右六月十日被免本職候ニ付六月十一日別紙請書差出候
一 二等軍医森林太郎
右六月七日獨逸國留學被 仰付候ニ付六月十一日別紙
請出候⁶

- ④明治十七年『大日記 局參監近医軍憲兵 七月水 陸軍省総務局』
陸軍省受領貳第一七五〇號 會甲第九百七十一号 総水局第五二三号
獨逸國留學生郵便船減價乗込切符交附
方之件農商務省へ御照會相成度義ニ付伺
今般二等軍医森林太郎獨逸國留學
被仰付不日出發ニ付テハ郵便船減價乗込
切符交附方左之通農商務省へ御照會
相成度文案相添此段相伺候也
明治十七年七月九日 會計局長川崎祐名
陸軍卿西郷従道殿⁷

御照會案

二等軍医森林太郎

右ハ当省海外留學生トシテ獨乙国へ不日出
發爲致候ニ付テハ横濱ヨリ佛国馬耳塞港
迄佛国郵便船減價乗込切符往片道分御
交付相成度此段及御照會候也

伺之通

七月十日⁸

- ⑤『外務省記録 海外旅券付与返納人名表』

一万六千九十九 森林太郎 留学 自 七月十五日 ^(ママ) 二十一 一月
四日⁹

⑥太政官文書局『官報 第三百貳拾五號』（明治十七年七月二十九日 火曜日）収録
宮廷録事
（前略）

○今般獨逸國へ留學仰付ケラレタル二等軍醫森林太郎ハ来ル八月一日
頃出發ニ付本日午前八時拜謁並ニ賢所参拜仰付ケラレ休所ニ於テ酒
饌ヲ下賜ハリタリ¹⁰

以上の諸史料から、森林太郎のドイツ留学決定の過程とそれに付随する事柄の流れとしては、次のようなものであったことが、分かる。

- (1) 明治十七（1884）年五月八日に「二等軍医森林太郎獨逸國へ留學」の上申が、陸軍軍医本部からなされた（①による）。
- (2) 同年六月五日に「二等軍醫森林太郎右獨逸國江留學」仰付の上申が、陸軍卿川村純義から出された（②による）。
- (3) 同年六月六日に「二等軍醫森林太郎獨逸國留學被仰付事」の奏上が、左大臣有栖川宮熾仁親王・参議福岡孝悌によってなされた（②による）。
- (4) 同年六月六日に「二等軍醫森林太郎獨逸國留學」が仰付られた（②による）。
- (5) 同年六月七日に「二等軍醫森林太郎獨逸國留學被 仰付候事」の辞令案が作成された（②による）。
- (6) 同年六月七日に「二等軍醫森林太郎獨逸國留學被 仰付候事」の発令があった（②・③による）。
- (7) 同年六月十日に「二等軍医森林太郎」は「軍医本部課僚」の職を免じられ、翌十一日にその「請書」を「軍醫本部長陸軍軍醫総監松本順」に提出した（③の前半部分）による）。
- (8) 同年六月十一日に、「六月七日獨逸國留學被 仰付」ところの「二等軍医森林太郎」は、それについての「請書」「軍醫本部長陸軍軍醫総監松本

順」に提出した(③の後半部分による)。

(9) 同年七月九日に陸軍省「會計局長川崎祐名」より陸軍卿西郷従道へ「二等軍医森林太郎獨逸國留學被仰」に付き郵便船減價乗込切符交の農商務省への照會の伺が出された(④の第一文書による)。つまり、陸軍省会計局から森林太郎のドイツ留学のため「郵便船減價乗込切符」の交付を農商務省へ照會することにつき陸軍卿への伺が出されたということになる。

(10) 同年七月十日に陸軍省「會計局長川崎祐名」よりの(9)の「伺い」が陸軍卿西郷従道によって裁可された(④の第二文書による)。したがって、森林太郎のドイツ留学のために、横浜からフランスのマルセイユまでの「佛國郵便船減價乗込切符往片道分」の交付が陸軍省会計局から農商務省に要請されたということである。

(11) 同年七月十五日に二等軍医森林太郎の留学のための「旅券」(番号一万六千九十九)が外務省より交付された(⑤による)。

(12) 同年七月二十九日に二等軍医森林太郎は皇居に参内して、天皇に拝謁の上、賢所に参拝した(⑥による)。

以上の(1)~(12)の手続き及び行事を経て、森林太郎はドイツ留学に出立することになったと、言えよう。

このように史料①~⑥に基づいて(1)~(12)の点に纏めたことから検討すると、以下のようなことが問題点として浮上してくる。

I. 森の『航西日記』の冒頭部でドイツ留学について「此行受命在六月十七日」¹¹とある。しかし、(6)で纏めたように「二等軍醫森林太郎獨逸國江留學被 仰付候事」の発令があったのは明治十七年六月七日である。また(8)で纏めたように六月七日「獨逸國留學被 仰付」ところの「二等軍医森林太郎」は、それについての「請書」を「軍醫本部長陸軍軍醫總監松本順」に提出したのは同年六月十一日である。それ故に、ドイツ留学の命を同年「六月十七日」に受けたとする『航西日記』の冒頭部の記述は誤りであろう。

II. (9)・(10)で纏めたように森林太郎のドイツ留学のために、横浜からフランスのマルセイユまでの「佛國郵便船減價乗込切符往片道分」の交付が

陸軍省会計局から農商務省に要請されたということであり、それが交付されたことは後に触れるようにフランスの郵船を森が利用していることから裏付けられる。したがって、また森は往きの旅費を現金で支給されたのではなく、「佛国郵便船減價乗込切符」であったことは、従来見逃されていたと言えよう。明治十二年五月に大蔵省から陸軍省に英仏郵船の減價乗込についての通知があり¹²、明治十三年六月に陸軍砲兵少尉伊地知幸介の普国留学に郵船減價乗込切符交付が陸軍省から大蔵省に申請されている¹³。だが、明治二十二年一月には、「官吏并官費留学生外国郵船に減價乗込切符交付」は廃止されている¹⁴。それ故に、郵船減價乗込切符によって官吏や官費留学生が派遣されていた時期に、これを利用して森林太郎は派遣されたのである。

Ⅲ. 『航西日記』の冒頭部に「八月二十日至陸軍省領封傳」¹⁵とあり、「封傳」とは関所の通行手形を意味するから、(11)で纏めたように七月十五日に外務省がすでに交付していた旅券を森は八月二十日に陸軍省から受け取ったということになるのであろう。苦木虎雄著『鷗外研究年表』の明治十七(1884)年八月二十日(水)の件には「曇、微雨。陸軍省に行き、旅費を受領する。」¹⁶となっており、『航西日記』の同日の件にある「封傳」が旅費と解釈されているようである。

Ⅳ. 『航西日記』の冒頭部の「七月二十八日詣闕拜天顏。辞別宗廟。」¹⁷とある。また、『自紀材料』には明治十七年「七月二十八日 聖上に拝謁し、賢所に参拝する。」¹⁸という記述がある。これらの記述は(12)で纏めた点と矛盾する。『明治天皇紀 第六卷』の明治十七年七月二十八日の件に「二等軍醫森林太郎は獨國に留學を命ぜられたるを以て、謁見所に召して謁を賜ふ、○官報、祭祀録」¹⁹とされているが、前掲の『官報 第三百貳拾五号』の記事と未公開の宮内庁史料『祭祀録』とはまた矛盾していると言えよう。

Ⅴ. (2)で纏めたように明治十七年六月五日に「二等軍醫森林太郎右獨逸國江留學」仰付の願を出した陸軍卿は川村純義であり、同年六月十日に陸軍省「會計局長川崎祐名」よりの「伺い」を裁可した陸軍卿は西郷従道という具合に陸軍卿の名前が頻繁に替わっていることも少しく注意を要する。

陸軍卿であった大山巖が陸軍首脳部とともに明治十七年二月十六日²⁰から翌年一月二十五日²¹にまでドイツを中心に欧米諸国の視察に赴いているので、上述のことはこれに関係するであろう。ドイツ帝国憲法を参考にして明治憲法を制定しようとする当時の政治的動きに対応するかのようになり、ドイツ陸軍の軍制を参考にして日本陸軍の軍制を確立しようとする動きがあり、この陸軍の視察団派遣はそれを物語っている。こうした時期に陸軍軍医本部は森をドイツ留学に派遣したことは、三思に値するのである。

2

『自紀材料』には明治十七年「八月二十三日東京を發す。」²²とあるが、ドイツ留学のために森林太郎が日本を出発した年月日についての記載は欠けている。『航西日記』によれば、森林太郎が渡独するために日本を出発した年月日は明治十七年八月二十四日であり、利用した船舶は「佛人所管」の「綿植勒」となっている²³。この点は、森の『航西日記』以外の客観的な一次史料の類で確認する必要があるのだが、従来そうした作業も充分になされたとは言い難い。

横浜で刊行されていた英字新聞 *Japan Weekly Mail*, August 30th, 1884. に掲載されている「船舶情報」を見ると、「出発」(Departures) の欄に *Manzaleh*, French steamer は八月二十四日とある²⁴ から、この船が『航西日記』八月二十四日にある「佛人所管」の「綿植勒」だと言える。

また、この英字新聞の「船舶情報」の「乗客」(PASSENGERS) の「出発(者)」(DEPARTED) には、Per French steamer *Manzaleh*, for Hongkong の部分に以下のような人名が列記されている。

..... S. Nagayo, Kumagawa, K. Taniba, T. Iimori, R. Mori, K. Katayama, S. Tanaka, Y. Hodzumi, M. Miyazaki, S. Hagiwara²⁵

ここにある R. Mori が森林太郎であることは、言うを俟たないから、ここに森のドイツ留学に関する客観的史料を見出したことになる。因みに、『航西日記』八月二十四日にある同船の日本人留学者名²⁶と照合してみると、S. Nagayo は長與稱吉(一八八六～一九一〇)、Kumagawa は隈川宗雄

(一八五八～一九一八)、K. Taniba は恐らく丹波敬三 (一八五四～一九二七)、T. Iimori は飯盛挺造 (一八五一～一九一五)、K. Katayama は片山國嘉 (一八五五～一九三一)、S. Tanaka は田中正平 (一八六二～一九四五)、Y. Hodzumi は穂積八束 (一八六四～一九一二)、M. Miyazaki は宮崎道三郎 (一八五五～一九二八)、S. Hagiwara は萩原三圭 (一八四〇～一八九四) ということになろう。

したがって、従来は森の『航西日記』の明治十七年八月二十四日の^{くだり}件などに基づいてのみ、彼のドイツ留学への出発が同日であるとされてきたが、ここに客観的な史料によってその年月日が確定できたことになる。

3

森の『獨逸日記』によれば、ベルリンに到着した翌日、すなわち明治十七 (1884) 年十月十二日に、当時ベルリンに滞在中の軍医監橋本綱常は森に留学の目的について、以下のように注意を与えたという。

政府の君に託したるは、衛生學を修ること、獨逸の陸軍衛生部の事を詢ふこと、の二つにあるぞ。(中略) 君は唯心を専らにして衛生學を修めよ。²⁷

橋本のこの発言は、森の受けた命は「赴德國修衛生學兼詢陸軍醫事也」²⁸と『航西日記』でされていることと一致している。しかし、その際に橋本は「制度上の事を詢はん」は、優れた見識を持った者のみ可能であるとして、制度上のような高度なことはしなくても良いので、「衛生学」の修得のみに専念せよ²⁹と、付言していることは注目に値する。また、森が受けた命である「赴德國修衛生學兼詢陸軍醫事也」は、今後一次史料で十分に確認する必要があるだろう。

次に、森には具体的な留学先は指定されてはいなかったようで、森の『獨逸日記』には、ベルリンに到着して4日目、すなわち明治十七 (1884) 年十月十四日の^{くだり}件に次のように記されている。

橋本氏を音信れぬ。衛生學を修ることに就きて、順序をたずねしに、先ずライプチヒのLeipzigなるホフマン Franz Hofmann を師とし、次

にミュンヘン Muenchen なるペツテンコオフエル Max von Pettekofer を師とし、最後にこゝなる Robert Koch を師となせと諭されぬ。さらば直ちにライプチヒへゆかむといひしに、卿の立たせ玉ふを送りて後にせよと留められぬ。³⁰

橋本の指示を森は大筋で守り、『獨逸日記』によれば、明治十七（1884）年十月二十二日にライプチヒに至り³¹、明治十九（1886）年三月八日にミュンヘンに移り³²、明治二十（1887）四月十六日にベルリンに移っている³³。ここで問題としなければならないのは、ライプチヒ・ミュンヘン・ベルリンでどのような形で留学していたのかという点である。

『獨逸日記』によれば、ライプチヒでは明治十七（1884）年十月「二十三日。ホフマンの許にゆく。」³⁴、同月「二十四日。大學の衛生部に往く。衛生部はリビヒ街にあり。これより日課に就くこととなりぬ。」³⁵とされており、ライプチヒ大学ではなくてホフマンが主宰する衛生研究所で森は日々研究に従事したということになる。ドイツの大学で学生として正式に学ぶ場合は、必ず「学籍簿」(Matrikel) に自筆で登録することになっている。学生登録した学生が在籍した学期ごとに「在籍簿」の類が一大学によってその名称は異なる一印刷・出版されている。ライプチヒ大学の1884年冬学期・1885年夏学期および冬学期の「学籍簿」には森林太郎の登録名は認められない³⁶。また、同大学の同上学期の「在籍簿」とも言うべき *Personalverzeichnis* にも森林太郎の名前は認められない³⁷したがって、森はホフマンの許可を得て、彼が主宰する衛生研究所で「日課に就く」形でライプチヒでは研究に従事したと言えよう。

ドレスデンでの「ザクセン陸軍冬季軍医学講習」に参加した後に、『獨逸日記』によれば、明治十九（1886）年三月九日ミュンヘンの「大学衛生部に至る。」³⁸とされている。『獨逸日記』は同年四月末から五月中旬まで記述が欠けているのだが、『自紀材料』によれば明治十九年「五月三日大學に入る。」³⁹と記されていることは刮目に値する。同大学の「学籍簿」—正式には *Die Matrikel der Königlich-Bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München*. —の「1886年夏学期」(*Sommersemester 1886.*)⁴⁰を精査し

たところ（図1）、森林太郎の記載を発見することができた。通し番号（Lufender Numerus）は123番、氏名（Zunamen, Vornamen）は森林太郎（Rintaro Mori）、両親の住所（Wohnort der Eltern）は東京、日本〔千住町19.〕（Tōkyō, Japan [Senju Strasse 19.]）⁴¹、研究（Studium）は医学（med.）と記載されている（図2）。この「学籍簿」に記載されている氏名などの筆跡はそれぞれ異なっているから、それぞれを各人物が記載したことは明白である。だが、それだけではこれが本当に森自身による記載であるとの決め手にはならない。史料批判の理論からすれば、すでに森自身によるサインと確定している史料で、この「学籍簿」のサインを批判的に検討する必要がある。東京大学総合図書館蔵の「鷗外文庫」にある Gutav Pfizer, *Martin Luther's Leben*, Stuttgart 1836.⁴²の「遊び紙」に「ドクトル森林太郎」（Dr. Rintaro Mori）のサインと「ミュンヘン 86年3月23日」（München 23.März 86.）とが書き入れられている（図3）のを、Fr. Aug. Quensted, *Sonst und Jetzt: populäre Vorträge über Geologie*, Tübingen 1886 (?)⁴³の「見返し」に「ドクトル森林太郎」（Dr. Rintaro Mori）のサインと「ミュンヘン 86年3月27日」（München 27.März 86.）とが書き入れられている（図4）のを発見した。「学籍簿」のサインとこれらのサインをと比較したところ、ほぼ一致した。しかも、上記の書物のサインと「学籍簿」サインは時間的に一か月ほどの差異しかない。以上のような批判的検討から、先に提示したミュンヘン大学の「学籍簿」の1886年夏学期に森自身が記載・登録したことを確定できた。ただ、「1886年夏学期」の記載年月日は、第1枚目に「1886年5月1日」と明記されている。ただ、森の記載した順番が123目であるから、本当に同日であったかは再考の余地があるかもしれない。と言うのも『自紀材料』に「五月三日大學に入る。」⁴⁴と記載されているからである。さらに、同大学の「在籍簿」とも言うべき *Amtliches Verzeichnis des Personal der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München*. の「1886年夏学期」（Sommer-Semester 1886.）⁴⁵および「1886/87年冬学期」（Winter-Semester 1886/87.）⁴⁶に森を確認することができた。前者（図5）

では、名前 (Name) は森林太郎、故郷 (Heimat) は東京、日本帝国 (Tokyo Kaiserreich Japan)、住所はフォイ街 16b/3 (Heustr.16b/3)、研究は医学 (Med.) とされている。後者 (図 6) では、名前 (Name) は森林太郎、故郷 (Heimat) は東京、日本 (Tokyo Japan)、住所はフォイ街 16b/3 (Heustr.16b/3)、研究は医学 (Med.) とされている。以上から、森林太郎はミュンヘン大学に 1886 年 5 月 1 日 (あるいは同月 3 日) に正式の学生として入り、同年度の夏学期および冬学期に在籍したという事実確定をすることが出来た。

『獨逸日記』によれば、ベルリンに再来してから四日目の明治二十 (1884) 年四月「二十日。北里余を誘ひてコツホ Koch を見る。従學の約を結ぶ。」⁴⁷、さらに五月「三十一日。コツホ師實驗の題目を授く。」⁴⁸ となっている。また、「自紀材料」でも、明治二十年四月「二十日北里柴三郎の紹介にて Robert Koch を見る」⁴⁹ と記されている。森はベルリンでもライプチヒ同様に大学に入ったのではなくて、北里柴三郎の仲介でコツホに師事することになり、コツホが主宰する研究所で研究に従事したということになる。事実、ベルリン大学の「学籍簿」(Matrikel) にも、「在籍簿」とも言うべき *Verzeichnisse des Pesonals und der Studierenden der Friedrich-Wilhelms- Universität Berlin.* にも森林太郎の名前は見出し得ない⁵⁰。したがって、上述のようにベルリンでは森はコツホに個人的に許可を得て、コツホ主宰の研究所で個人的に指導を受けて研究に従事したと言えよう。

だが、ベルリン時代の森林太郎は、留学本来の研究・学術修得以外の日本陸軍軍医としての業務を避けることが出来なくなる。その実例が明治二十 (1887) 年の第四回国際赤十字大会への参加と明治二十一 (1888 年) の「隊付き勤務」である。前者については森の華々しい活躍を中心に従来から多くの考察がなされている。後者については、従来あまり詳しく見てこられなかった。プロイセン近衛歩兵第二連隊における「隊付き勤務」についての同「連隊医長ケーレル」の報告書の訳文が、外務省経由で陸軍省に明治二十一年九月二十五日に渡されている⁵¹。したがって、ドイツにおける森の「隊付き勤務」は様々な意味で重要視されていたことが推測され

る。因みに、*Rang- und Quartier-Liste der Königlich Preußischen Armee für 1888*. (『1888年のプロイセン王国陸軍階級及び駐屯地表』)⁵²に見出されるベルリンの「近衛歩兵第二連隊」(2. Garde-Regiment zu Fuß)の「連隊医」(R. Arzt)の軍医正ケーラー(Köhler)が、「連隊医長ケーレル」と判断できる。いずれにしても、第四回国際赤十字大会への参加と「隊付き勤務」は前述のように留学に関するというよりは、むしろ日本陸軍軍医としての業務であるので、ここでは指摘するだけに止めたいと思う。

4

森のドイツ留学からの帰国については、森自身の『還東日記』によれば明治二十一年九月「八日。朝。抵横濱。午後入東京。」⁵³とされている。この点についての公式記録や一次史料によって確認の要がある。

英字新聞 *Japan Weekly Mail*, September 15th, 1888. に掲載の「船舶情報」の「到着」(Arrivals)の欄に九月八日到着 *Ava*, French steamer とあるが、その「乗客」(PASSENGERS)として以下の人名が列記されている。

Per French steamer *Ava*, from Hongkong via Shanghai and Kobe :
-Baron Maeda, Dr. Mori⁵⁴

内閣官報局『官報 第千五百六拾三號』(明治二十一年九月十二日 水曜日)収録の「官廳事項」に触れられており、それは以下の通りである。

(前略)

・醫務局次長陸軍軍醫石黒忠憲ハ去ル八日歐洲ヨリ帰朝・陸軍二等軍醫森林太郎ハ獨逸國へ留學ノ處去ル八日帰朝セリ⁵⁵

また、森自身についてはないが、石黒の帰朝について、陸軍省の『明治二十一年分 本省年報』の「明治二十一年十二月三十一日調 所属在外人表 醫務局」の「備考欄」に以下のように記されている。

軍医監石黒忠憲御用有之二十年五月廿八日ヨリ歐行中ノ処本年九月八日帰朝(後略)⁵⁶

以上から、ドイツ留学を終えた森は、石黒とともに、二十一年九月八日に帰朝したことの事実確認が出来たことになる。

また、森はドイツ留学のために出発する直前の明治十七年七月二十八日に軍医森林太郎は皇居に参内して、明治天皇に拝謁しているわけであるから、当然帰国後の拝謁がなされなければ、軍医森林太郎のドイツ留学は完結しないとも言える。この点について一次史料を探ってみなければならぬであろう。

陸軍省の明治二十一年『貳大日記』収録文書「総務五七四号」は以下の通りである。

陸軍省送達 送甲一三九七号

陸軍々醫監石黒忠恵

同二等監督野田豁通

同砲兵大尉楠瀬幸彦

同一等軍醫森林太郎

右今般歐州ヨリ帰朝致候ニ付而者序ヲ

以テ

謁見被仰付候様御執奏相成度此段

及御照会候也

明治廿一年九月十日

陸軍大臣伯爵大山巖

宮内大臣子爵土方久元殿⁵⁷

陸軍省から送達された、明治廿一年九月十日付け「甲一三九七号」の史料によれば、陸軍大臣から宮内大臣宛てに、帰朝した石黒・野田・楠瀬・森に対して謁見仰せ付けの奏上の照会がなされているのである。

そして、上の謁見仰せ付けの奏上の照会に対して、陸軍省の明治二十一年『壹大日記』収録文書「総省第三二六号」は以下のようになっている。

受領番号 壹第一八三二号 廳名 宮内省

件名 石黒軍醫監外三名拝謁之件

議 按 明治廿一日九月廿五日

石黒軍醫監野田二等監督楠瀬砲兵大尉

森一等軍醫へ御達案

今般婦朝ニ付来ル廿七日午前十時
拝謁被仰付候旨被仰出候条九時限前参
内スヘシ⁵⁸

陸軍省受領 壹第一八三二号 九月二十五日
式部職送第一三七六号
陸軍々醫監石黒忠恵外三名今般婦朝
ニ付拝謁之儀御申越ノ趣頓承知^マ遂
奏聞候處来ル廿七日午前十時拝謁
被仰付候旨被仰出候此段申進
候也

明治二十一年九月廿五日

宮内大臣子爵土方久元

陸軍大臣伯爵大山巖殿⁵⁹

宮内省式部職から送達され、陸軍省が受領した明治二十一年九月二十五日付け「壹第一八三二号」の史料によれば、宮内大臣土方久元から陸軍大臣大山巖宛てに、婦朝した石黒他三名の拝謁が聞き届けられたので、同月「廿七日午前十時拝謁」が仰せ付けられたことが通知されている。宮内省から送達され、陸軍省が受領した明治二十一年九月廿五日付けの「受領番号 壹第一八三二号」の史料は、婦朝した石黒・野田・楠瀬・森に対して、同月二十七日午前十時に拝謁が仰せ付けられるので九時前に参内するようにとの「達案」であるから、これに従って上記四名にその旨が通達されたということになろう。以上から、ドイツ留学から戻った森林太郎は明治二十一年九月二十七日に拝謁したと言えよう。

また、石黒忠恵の『日乗 第四 自明治廿一年七月廿四日（巴里）至同年十二月三十一日』の九月二十七日の件の冒頭部分に以下のように記されている。

九月二十七日 晴 十時 謁見被仰付（後略）⁶⁰

ここから、石黒は実際に明治天皇に拝謁したことが確定できる。したがって、ここからも森林太郎がその時に石黒とともに拝謁したと言えよう。

さらに、内閣官報局『官報 第千五百七拾六號』（明治二十一年九月二十八日 金曜日）収録の「宮廷録事」には、以下のようにされている。

○拝謁 陸軍軍醫石黒忠憲、陸軍二等監督野田豁通、陸軍一等軍醫森林太郎、陸軍砲兵大尉楠瀬幸彦、同伊地知幸介、正五位子爵松平乗承ハ孰モ欧洲ヨリ帰朝ニ付キ昨二十七日午前十時拝謁仰付ケラレタリ⁶¹

それゆえ、ドイツ留学から戻った森林太郎は、上に述べたようなプロセスを経て、明治二十一年九月二十七日に明治天皇に拝謁したという事実が、ここに確定出来たということになる。森林太郎のドイツ留学は、ここに論証したように、明治二十一年九月二十七日に天皇に拝謁することによって、完結したと言うことも出来る。

結びに代えて

森林太郎の明治十七年から同二十一年にかけてのドイツ留学の若干の点について、従来は厳密に考察されて来なかったことを中心に、新発見の一次史料などを踏まえて考察したわけであるが、無論それは森個人のドイツ留学の未解明な点を厳密な史料批判の方法で解明し得たことを意味する。特に、従来は森自身が記した『航西日記』のみによって論じられることが多かった森のドイツ留学に向けて横浜を発った月日、搭乗した船名、同乗者については、新聞掲載の客観的な「船舶情報」で再確認出来た。従来は森のライプチヒ・ミュンヘン・ベルリン各大学での留学の具体的在り方に想いが輸されることがなかったが、ミュンヘン大学に於いて森は一八八六年五月初頭に学籍登録し、同年夏学期および冬学期の両学期のみ在籍したことを見出すことを出来た。しかし、これは単にそれだけではなく、これを通じて、ドイツに傾斜しつつ立憲国家が形成されつつあった明治中期にドイツへの留學生の派遣が具体的にはどのようなになされ、当該時期におけるドイツ留学の意味が奈辺にあったのかという点を問い直す契機になったとも言えるのである。

注

1. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C08071436800. 『明治十七年文書受領日記近士戸団医馬尉』。この前年の明治十六年十月十二日に軍医本部は「独逸国へ留学生一名被差遣度件」について上申している。JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C08071425200. 『明治十六年文書受領日記近士戸団医馬尉』。中井義幸『鷗外留学始末』岩波書店 2010年、133頁で言及されている明治十六年に「差し戻されてきた」ところの「軍医官一名独逸国留学ニ付上申書」とは、上記の件を意味しているのだろうか。
2. 『明治十七年 公文録 官吏進退陸軍 従五月至八月 全』国立公文書館蔵。
3. 『明治十七年 公文録 官吏進退陸軍 従五月至八月 全』国立公文書館蔵。
4. 『明治十七年 公文録 官吏進退陸軍 従五月至八月 全』国立公文書館蔵。
5. 『明治十七年 公文録 官吏進退陸軍 従五月至八月 全』国立公文書館蔵。
6. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C09060052000. 『明治十七従一月至六月 日報 近衛局 軍医本部 軍馬局 病馬尉』。
7. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C04031155500 『明治十七年 大日記 局参監近医軍憲兵 七月水 陸軍総務局』。
8. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C04031155500 『明治十七年 大日記 局参監近医軍憲兵 七月水 陸軍総務局』。
9. 『外務省記録 海外旅券付与返納人名表』外務省外交史料館蔵。ここに「二十一 一月四日」と記載されているのが、「海外旅券返納」の年月日という意味で明治二十一年一月四日ということであるならば、それは正しくないであろう。何故ならば、明治二十一年一月四日には森はまだドイツ滞在中だからである。
10. 太政官文書局『官報 第三百貳拾五號』(明治十七年七月二十九日 火曜日)、1884年。
11. 木下空太郎他編輯『鷗外全集』第三十五巻 岩波書店 1975年(以下、本書は『鷗外全集』第三十五巻と略す)75頁。
12. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C04028345900 明治十二年『大日記諸省来書 五月 月 陸軍省第一局』。
13. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C04029102000 明治十三年『大日記 諸局の部 六月 水 陸軍省総務局』。
14. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B11092432700 『官吏并官費留学生外国郵船ニ減價乗込ノ切符ヲ廃止海外旅券代用一件 自明治二十二年』。
15. 『鷗外全集』第三十五巻75頁。
16. 苦木虎雄著『鷗外研究年表』鷗出版 2006年(以下、本書は、苦木『鷗外研究年表』と略称する。)102頁。また、明治十三年の小金井良精のドイツ留学の際には「文部省よりの留学費は一年分として二〇〇円が支給された。東京―ベルリン間の旅費合計は三六〇ドル、邦貨で七二〇円であったことが、『祖父・小金井良精の記』に見えている。」と、苦木『鷗外研究年表』69頁には記載されていることから、森林太郎は留学の船賃

を現金で受け取ったと理解されていることが分かる。

17. 『鷗外全集』第三十五巻 75 頁。
18. 『鷗外全集』第三十五巻 12 頁。
19. 宮内省編『明治天皇紀 第六』吉川弘文館 1971 年、269 頁。
20. *L'ÉCHO DU JAPON*, 16 Février 1884. PASSEGERS.
21. *The Weekly Mail*, January 31st, 1885. PASSEGERS.
22. 『鷗外全集』第三十五巻、13 頁。
23. 『鷗外全集』第三十五巻、75 頁。
24. *Japan Weekly Mail*, August 30th, 1884.
25. *Japan Weekly Mail*, August 30th, 1884.
26. 『鷗外全集』第三十五巻、75 頁。この九人の生没年は、手塚晃・石島利男共編『幕末明治初期海外渡航者人物情報事典』（CD-ROM 版）金沢工業大学 2003 年に依拠した。
27. 『鷗外全集』第三十五巻、87 頁。橋本は、大山巖以下の陸軍欧米視察団の一員としてこの時期はベルリンに滞在中であった。森の『自紀材料』明治十六年三月二十六日の件には「橋本綱常氏を訪ひて歐洲に随行せんと乞う。聴かれず。」とあり、橋本とはそういう関係にあった。
28. 『鷗外全集』第三十五巻、75 頁。
29. 『鷗外全集』第三十五巻、87 頁。
30. 『鷗外全集』第三十五巻、88 頁。
31. 『鷗外全集』第三十五巻、88 頁。
32. 『鷗外全集』第三十五巻、134 頁。
33. 『鷗外全集』第三十五巻、162 頁。
34. 『鷗外全集』第三十五巻、88 頁。
35. 『鷗外全集』第三十五巻、89 頁。
36. Archiv der Universität Leipzig からの論者への回答による。
37. 同上。
38. 『鷗外全集』第三十五巻、135 頁。
39. 『鷗外全集』第三十五巻、15 頁。
40. *Die Matrikel der Königlich-Bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Sommersemester 1886*. Archiv der Ludwig-Maximilians-Universität München, D-V-31. この史料を図 1・2 として掲載することを許可頂いた Archiv der Ludwig-Maximilians-Universität München に感謝申し上げたい。
41. 森林太郎自筆の明治十四年十月二十三日付の「医師開業免状下附願書」（桜田満編『現代日本文学アルバム 第 1 巻 森鷗外』学習研究社 1974 年、127 頁所収印影史料）によれば、住所は「南足立郡千住一丁目十九番地」となっており、Senju Strasse 19. はこれを意味すると想われる。
42. 東京大学総合図書館所蔵資料 鷗 C400 : 217. この史料を図 3 として掲載することを許可頂いた東京大学総合図書館に感謝申し上げたい。
43. 東京大学総合図書館所蔵資料 鷗 T500 : 118. この史料を図 4 として掲載することを

- 許可頂いた東京大学総合図書館に感謝申し上げます。
44. 『鷗外全集』 第三十五巻、15 頁。
 45. *Amtliches Verzeichnis des Personal der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München*. Sommer-Semester 1886. S. 64. <http://epub.ub.uni-muenchen.de/9620/> この史料を図5として掲載することを許可頂いた Bibliothek der Ludwig-Maximilians-Universität München に感謝申し上げます。
 46. *Amtliches Verzeichnis des Personal der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München*. Winter-Semester 1886/87. S. 67. <http://epub.ub.uni-muenchen.de/9621/> この史料を図6として掲載することを許可頂いた Bibliothek der Ludwig-Maximilians-Universität München に感謝申し上げます。
 47. 『鷗外全集』 第三十五巻、163 頁。
 48. 『鷗外全集』 第三十五巻、165 頁。
 49. 『鷗外全集』 第三十五巻、16 頁。
 50. Archiv der Friedrich-Wilhelms- Universität Berlin からの論者への回答による。
 51. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C03030413300 明治二十一年『壹大日記壹』。
 52. *Rang- und Quartier-Liste der Königlich Preußischen Armee für 1888. Berlin 1888*. S.102.
 53. 『鷗外全集』 第三十五巻、224 頁。
 54. *Japan Weekly Mail*, September 15th, 1888. PASSENGERS.
 55. 内閣官報局『官報 第千五百六拾三號』(明治二十一年九月十二日 水曜日)、1888年。『自紀材料』によれば、明治十八年五月二十七日に一等軍醫に任ぜられ、その辞令を同年七月十五日にライブチヒで受領している(『鷗外全集』 第三十五巻、14 頁)から、ここに二等軍醫とあるのは誤りであろう。
 56. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C09060095700 明治二十一年分(陸軍省)本省年報。
 57. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C06080567400 明治二十一年『貳大日記 九月』第二十九文書。
 58. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C03030412700 明治二十一年『壹大日記 壹』。
 59. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C03030412700 明治二十一年『壹大日記 壹』。
 60. 石黒忠恵『日乗 第四 自明治廿一年七月廿四日(巴里)至同年十二月三十一日』国立国会図書館蔵。
 61. 内閣官報局『官報 第千五百七拾六號』(明治二十一年九月二十八日 金曜日)、1888年。

Laufender Numerus.	Zunamen, Vornamen	Wohnort der Eltern.	Studium.
	<i>Sommersem. 1886.</i>		
	<i>1. Mai 1886.</i>		
<i>1</i> <i>1089</i>	<i>Franz Brühl</i>	<i>Herdorf</i>	<i>med.</i>
<i>2</i>	<i>Franz Preyer</i>	<i>Olpen</i>	<i>jud.</i>
<i>3</i>	<i>Carl Giese</i>	<i>Jena.</i>	
<i>4</i>	<i>Wenzel Keimer</i>	<i>Recklinghausen</i>	<i>med.</i>
<i>5</i>	<i>Flack, Josef</i>	<i>Amulack</i>	<i>Geol.</i>
<i>6</i>	<i>Leo Yeligmann</i>	<i>Bingen</i>	<i>jud.</i>
<i>7</i>	<i>Friedrich Mandel</i>	<i>Arnbach</i>	<i>med.</i>
<i>8</i>	<i>Rudolf Weisand</i>	<i>Hirges</i>	<i>Geol.</i>
<i>9</i>	<i>Carl Muw</i>	<i>Arnsberg</i>	<i>Medizin</i>
<i>10</i>	<i>Johann Rattenhuber</i>	<i>Freising</i>	<i>Philologie</i>

图 1: Die Matrikel der Königlich-Bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Sommersemester 1886. S.1. Archiv der Ludwig-Maximilians-Universität München, D-V-31.

Laufzähler Numerus.	Zunamen, Vornamen.	Wohnort der Eltern.	Studium.
121 1209	Mucesianu Svec.	Naszod in Siebenbürgen	Kunst- geschichte
122	Mlossavljevit's Andre.	Kragujevac Serbien	jur.
123	Pintaro Mori	Tokyo, Japan. (Senju Strasse 19)	med.
124	Edward Fritsen von Dellingshausen	Kallistebach in Schland (Hamburg)	phgs
125	Max Weber	Hilbersdorf bei Chemnitz	med.
126	Joh. Roth	Ullmar Nafsan	theol.
127	Aug. Borchard	Lemgo Hauptstrasse 17	med.
128	Hugo Pilgram	Barmen	med.
129	Wth. Horniger	Lemgo	med
130	Frid. Mann	Gräfenthal	jur.

Fig. 2: Die Matrikel der Königlich-Bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Sommersemester 1886. S.12. Archiv der Ludwig-Maximilians-Universität München, D-V-31.

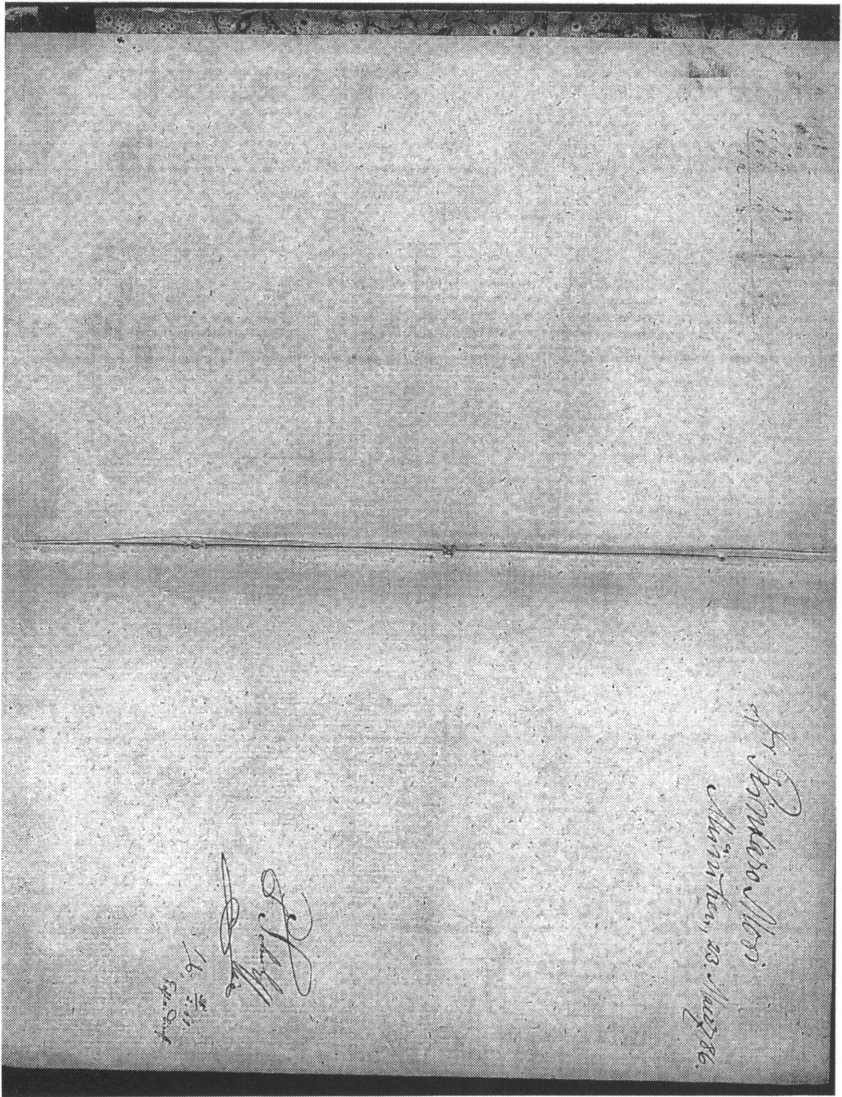


図3: Gutav Pfizer, *Martin Luther's Leben*, Stuttgart 1836. (東京大学総合図書館所蔵資料 鷗 C400:217.) の「遊び紙」

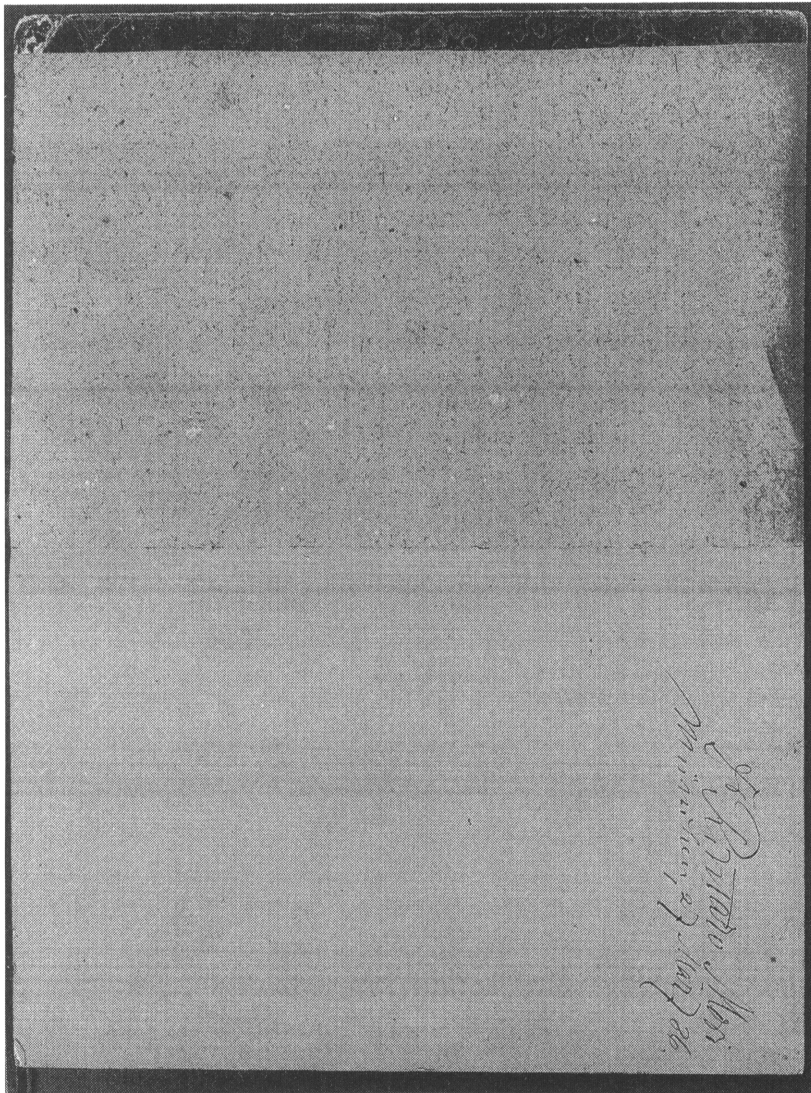


図4: Fr. Aug. Quenstedt, *Sonst und Jetzt: populäre Vorträge über Geologie*, Tübingen 1886 (?). (東京大学総合図書館所蔵資料 鴫 T500:118.) の「見返し」

Amtliches Verzeichnis
des
Personals
der
Lehrer, Beamten und Studierenden
an der
königlich bayerischen
Ludwig-Maximilians-Universität
zu München.

Sommer-Semester
1886.

München 1886.

Kgl. Hof- und Universitäts-Buchdruckerei von Dr. C. Wolf & Sohn.

图 5: *Amtliches Verzeichnis des Personals der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Sommer-Semester 1886.*, München 1886. Titelblatt. <http://epub.ub.uni-muenchen.de/9620/> Bibliothek der Ludwig-Maximilians-Universität München.

Name.	Heimat.	Wohnung.	Studium.
Mössmer Franz	München Bayern	Herrenstr. 1/3 r.	Jur.
Mössmer Mathias	Vilshofen "	Sonnenstr. 6/2	Jur.
Mohr Ferdinand	Hambach "	Hessstr. 11/2	Theol.
Mollier Siegfried	Triest Oesterreich	Brienerstr. 34/1 R.	Med.
Mondada Johann Bap.	Minusio Schweiz	Türl.enstr. 57/0	Jur.
Mooshammer Anton	München Bayern	Georgianum	Theol.
Moraht Hans	Hamburg Hamburg	Schwanthalerstr. 15/1	Med.
Moraht Hermann Adolf	Hamburg "	Schwanthalerstr. 10a/2r.	Natw.
Moretti Eliachim	Cevio Schweiz	Schellingstr. 32/3	Jur.
Mori Rintaro	Tokyo Kaiserreich Japan	Heustr. 16b/3	Med.
Morian Franz Karl	Blieskastl Bayern	Schillerstr. 21/3 r.	Med.
Moritz Fritz	München "	Lilienstr. 38/1	Med.
Moritz Heinrich	Kollnburg "	Dachauerstr. 107/2	a. Philol.
Morkel Daniel John	Stellenbosch Capland	Bayerstr. 47/3 l.	Med.
Morton St. Henry	New-Yersey Amerika	Sonnenstr. 16	Med.
Moshbacher David	München Bayern	Glückstr. 4/1	Jur.
Moscheles Robert	Prag Oesterreich	Salvatorstr. 14 ¹ / ₂ /3	Chem.
Moser Anton	Rosenheim Bayern	Amalienstr. 20/3	Jur.
Moser Eugen	Waldkirch Baden	Barerstr. 46/3	Forstw.
Motz Karl	Esslingen Württemberg	Mittererstr. 10/2	Med.
Moureau Reinhard	Cubach Hessen-N.	Schwanthalerstr. 69/2	Pharm.
Muckenschnabl Ignaz	Passau Bayern	Bayerstr. 23	Jur.
Mühlendorfer Anton	Amberg "	Färbergraben 9/2	Jur.
Mühlhaus Franz	Kirchworbia Pr. Sachsen	Schillerstr. 32/3	Med.
Mühleisen Jul. F. Georg	Strassburg Elsaas-Lothringen	Barerstr. 86/3	Jur.
v. u. z. Mühlen Ludwig	Münster Westfalen	Hessstr. 21/1	Forstw.
v. d. Mühle Paul	Basel Schweiz	Lindwurmrstr. 5a/3	Med.
Mühlbauer Adalbert	Bamberg Bayern	Blüthenstr. 23/2	Pharm.
Müller Adolf	Walsdorf "	Landwehrstr. 31/1 r.	Jur.
Müller Alexander	Leutmannsdorf Schlesien	Schwanthalerstr. 69/2	Med.
Müller Arthur	Gotha Sachsen-Cob.-Gotha	Dachauerstr. 1a/3	Med.
Müller Eberhard	München Bayern	Schillerstr. 39/1 l.	Pharm.
Müller Eduard	Obervichtach "	Heustr. 1a/1	Med.
Müller Emil	Hof "	Amalienstr. 62/0	Jur.
Müller Emil	Steinbach Baden	Amalienstr. 50b/1	Jur.
Müller Ernst	Augsburg Bayern	Finkenstr. 4/1	Jur.
Müller Ferdinand	Mannheim Baden	Rottmannstr. 26/2	Chem.
Müller Franz	Luxemburg Luxemburg	Goethestr. 4/3 r.	Med.
Müller Friedrich	Mannheim Baden	Landwehrstr. 47/3 r.	Med.
Müller Heinrich	Passau Bayern	Marsstr. 2/3	Pharm.
Müller Heinrich	Burgbernheim "	Marsstr. 27/2 l.	Pharm.
Müller Johannes	Laupheim Württemberg	Schillerstr. 17/3 r.	Med.
Müller Josef	Teuschnitz Bayern	Adalbertstr. 13/3	Jur.
Müller Karl	München "	Jägerstr. 5/1 l.	Jur.
Müller Karl	Walsdorf "	Landwehrstr. 31/1 r.	Forstw.
Müller Max	München "	Theresienstr. 22/0 R.	Med.
Müller Max	Nürnberg "	Ingolst.-Landstr. 62/0	Philol.
Müller Max	Stuttgart Württemberg	Landwehrstr. 59/3 r.	Med.
Müller Moritz	St. Petersburg Russland	Zweibrückenstr. 2/3	Phil.
Müller Oscar	Landau i/Lf. Bayern	Theresienstr. 26/2	Philol.
Müller Otto	München "	Müllerstr. 3/1	Philol.
Müller Phil.	Weissenheim a/S. "	Bayerstr. 46/2 r.	Med.
Müller Rudolf	Gross-Niederheim "	Arcisstr. 16a/1 l.	Chem.
Müller Theodor	Schweinfurt "	Marsstr. 8/1 l.	Pharm.
Müller Ulrich	Nieder-Lichtenau Schlesien	Louikenstr. 19/0	Jur.
Müller Wilhelm	Herleshausen Hessen-N.	Theresienstr. 62/2 R.	Med.

図5: Amtliches Verzeichnis des Personals der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Sommer-Semester 1886., München 1886. S.64. <http://epub.ub.uni-muenchen.de/9620/> Bibliothek der Ludwig-Maximilians-Universität München.

上から10番目に、Mori Rintaroが掲載されている。

Amtliches Verzeichnis
des
Personals
der
Lehrer, Beamten und Studierenden
an der
königlich bayerischen
Ludwig-Maximilians-Universität
zu München.

Winter-Semester
1886/87.

München 1886.

Kgl. Hof- und Universitäts-Buchdruckerei von Dr. C. Wolf & Sohn.

☒ 6: *Amtliches Verzeichnis des Personals der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Winter-Semester 1886/87.* München 1886. Titelblatt. <http://epub.ub.uni-muenchen.de/9621/> Bibliothek der Ludwig-Maximilians-Universität München.

Name.	Heimat.	Wohnung.	Studium.	
Messow Gustav	Soldin	Brandenburg	Marsstr. 4a/0	Pharm.
Mettin August	München	Bayern	Burgstr. 6/2	Med.
Metzger Joh. Georg	Endsee	«	Marsstr. 27/2	Pharm.
Metzger Carl	Urach	Württemberg	Gabelbergerstr. 36/1	Pharm.
Metzler Peter	Knauthen	Luxemburg	Landwehrstr. 42/1	Med.
Metzner Carl	Nieder-Vellmar	Hessen	Barerstr. 82/0	Jur.
Mey Oscar	Weiler	Bayern	Wittelsbacherpl. 3/2	Med.
Meyer Adolf	Crefeld	Rheinpr.	Schwanthalerstr. 69/1r.	Med.
Meyer Anselm	Wörth	Württemberg	Schellingstr. 69/3 r.	Jur.
Meyer Arthur	Treia	Schleswig	Landwehrstr. 48/2 r.	Med.
Meyer Eduard	Vechta	Oldenburg	Theresienstr. 34/2	Pharm.
Meyer Friedrich	Rothenburg	Bayern	Dachauerstr. 70/0	Jur.
Meyer Hans	Bamberg	«	Barerstr. 64/0 r.	Jur.
Meyer Karl	Treia	Schleswig	Marsstrasse 3/1 r.	Pharm.
Meyer Karl	Regensburg	Bayern	Amalienstr. 68/0	Forstw.
Meyer Leonhard	Happurg	«	Augustenstr. 92/1	Jur.
Meyer Ludwig	München	«	Peterspl. 8/3	Pharm.
Meyer Paul	Leipzig	Sachsen	Liebigstr. 13/3	Chem.
Meyer Georg	Loschwitz	«	Spitalstr. 2/2	Med.
Meyerowitz Louis	Dünaburg	Russland	Schwanthalerstr. 67/2	Chem.
Mezger Robert	Heidelberg	Baden	Schraudolphstr. 14/21.	Philol.
Michel Nepomuk	Wemding	Bayern	Georgianum	Theol.
Michel Richard	Bamberg	«	Maximilianstr. 38/1 r.	Jur.
Mielitz Max	Petersdorf	Schlesien	Augustenstr. 8/3	Pharm.
Milm Georg	Burghausen	Bayern	Hasenstr. 5/2	Jur.
Miller Alfred	Riedlingen a/D.	Württemb.	Karlstr. 56/1 r.	Jur.
Miller Eugen Robert	Riedlingen a/D.	«	Karlstr. 56/1 R.	Pharm.
Miller Joseph	Leinheim	Bayern	Georgianum	Theol.
Milossavljevitch Andre	Kragujevaz	Serbien	Türkenstr. 59/2	Jur.
Mitnacht Eugen	Altshausen	Württemberg	Augustenstr. 63/3	Forstw.
Mitrücker Anton	Hettenleidelheim	Bayern	Amalienstr. 41/2 R. 1.	Phil.
Moebius Wilhelm	Furth i/W.	«	Spitalstr. 5/1	Med.
Möller Wilhelm	Vehs	Hannover	Sonnenstr. 17/2	Med.
Möricke Wilhelm	Stuttgart	Württemberg	Marsstr. 10/1 r.	Naturw.
Möser Hermann	Oppeln	Schlesien	Sonnenstr. 16	Med.
Mössmer Anton	München	Bayern	Herrenstr. 1/3 r.	Jur.
Mössmer Ferdinand	München	«	Herrenstr. 1/3	Jur.
Mössmer Franz	München	«	Herrenstr. 1/3 r.	Jur.
Mohr Ferdinand	Hambach	«	Amalienstr. 39/3 1.	Theol.
Mollath Georg	Frankfurt a/M.	Hesseu-N.	Goethestr. 14/4 1.	Med.
Mollier Siegfried	Triest	Oesterreich	Briennerstr. 34/2 R.	Med.
Monnier Philippe	Genf	Schweiz	Augustenstr. 77/1	Jur.
Moos Hugo	Ulm a/D.	Württemberg	Schillerstr. 7/1	Med.
Mooshammer Anton	München	Bayern	Georgianum	Theol.
Morait Herm.	Hamburg	Hamburg	Schwanthalerstr. 14/1	Chem.
Morgott Johann	Dietfurt	Bayern	Hörnmannstr. 64/1	Jur.
Morhart Otto	Aschaffenburg	«	Türkenstr. 98/3	Jur.
Mori Rintaro	Tokyo	Japan	Heustr. 16B/3	Med.
Morian Franz Karl	Blieskastl	Bayern	Schillerstr. 21/3 r.	Med.
Moritz Fritz Dr.	München	«	Landwehrstr. 71/3	Med.
Moritz Heinrich	Kollnburg	«	Dachauerstr. 107/2	Philol.
Moroff Adolph	Hof	«	Barerstr. 82/3	N. Spr.
Mosbauer David	München	«	Glückstr. 4/1	Jur.
Moscheles Robert	Prag	Oesterreich	Schützenstr. 2/2	Chem.
Moser Anton	Rosenheim	Bayern	Amalienstr. 20/3 1.	Jur.
Moser Emil	Landau i. Rf.	«	Landwehrstr. 39/2 R.	Med.

6*

図6: Amtliches Verzeichnis des Personals der Lehrer, Beamte und Studierenden an der königlich-bayerischen Ludwig-Maximilians-Universität zu München. Winter-Semester 1886/87. München 1886. S.67. <http://epub.ub.uni-muenchen.de./9621/> Bibliothek der Ludwig-Maximilians-Universität München.

下から9番目に、Mori Rintaro が掲載されている。